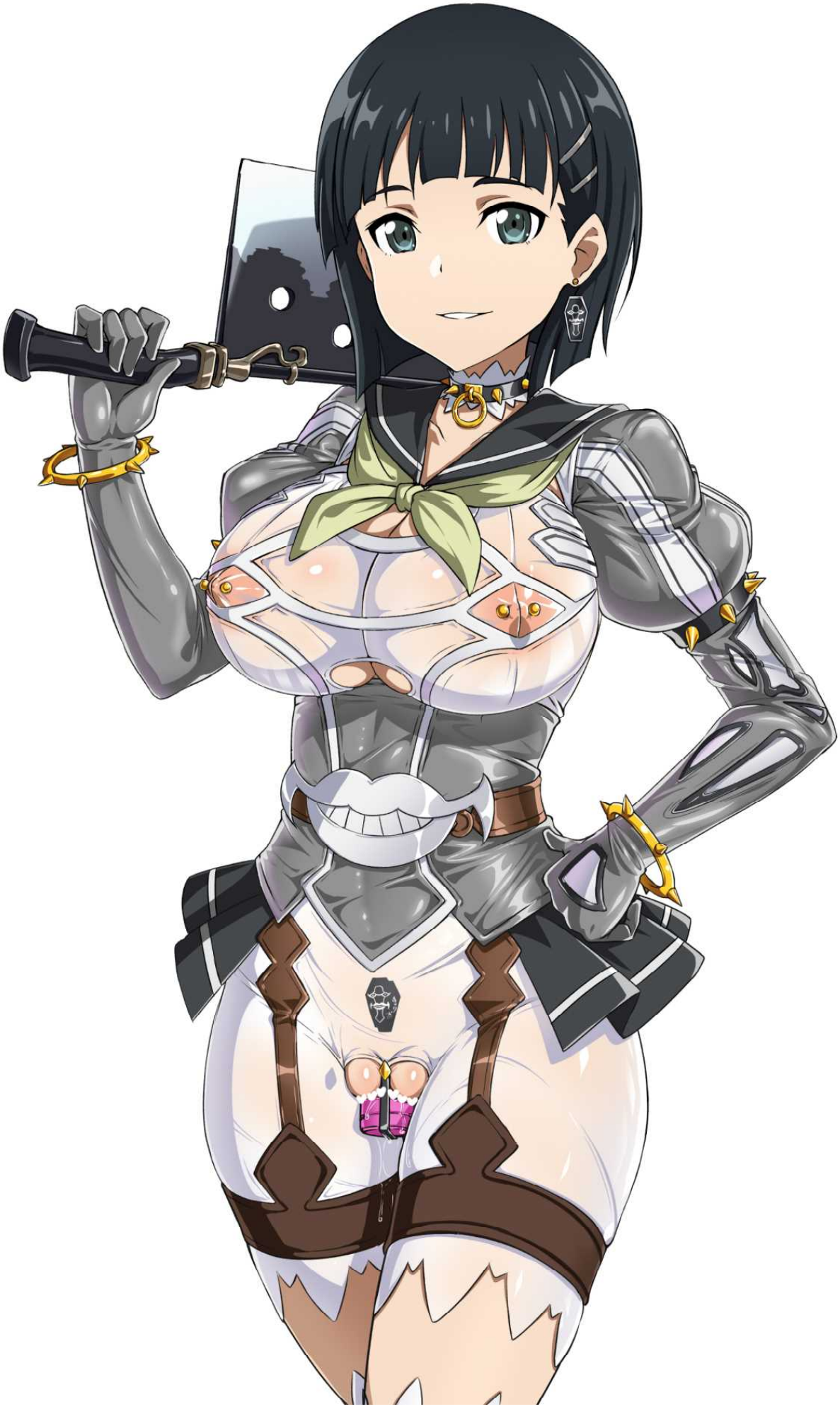


アインクラッド低層階。
最前線は六十層を越え、すっかり人の入りもなくなった低層の森を一人の男が足早に抜けてゆく。
男は現在の最前線で攻略に参加する、攻略組の一人だった。
鍛え上げた武器とステータスを頼りに、出会う端からモンスターを次々と屠っていく。
この森の奥側には、この層としては明らかにレベルの高いモンスターが出現する。
低層を狩り場とするようなプレイヤーからすれば苦戦する相手であるものの、しかしドロップ品はたいしたものというわけでもなく、上の層を狩り場にできるようなレベルのプレイヤーからの需要もない。初攻略時こそ、宝箱から回収したアイテムによってそれなりの稼ぎにはなったものの、攻略が上層に移っている今となってはわざわざ訪れるものなどほとんどいない。
たまには一人でのんきに素材集めをしたい。
そんな理由をつけて、男はギルドの仲間とは別行動でこの森へと訪れていた。
モンスターの中には、麻痺などの状態異常にさせる攻撃を持っているものも少なくない。レベルに安全マージンをとっていたとしても死の危険は常に付きまとう。
それでも、推奨レベルが二十やそこらの中、三倍以上のレベルともなれば五回や十回、麻痺を受けてモンスターからタコ殴りにされたところでＨＰバーは赤の危険域はおろか黄色の警告域にすら達しない。

「さて、そろそろかな……」
整っているとは言いがたい顔立ちをにやけさせて、男は待ちきれないとばかりに歩を早める。
男がこの場所にやってきたのには、ギルドの仲間に語ったものとは別の、秘密の理由があった。
痴女の噂だ。
約一万人のプレイヤーがこの浮遊城（アインクラッド）に囚われて早二年近く。そうして囚われ続ける間にも、プレイヤーたちには生理的欲求が存在した。
睡眠欲については問題ない。睡眠は脳の休養であるため、ゲーム内であっても変わらない。
食欲についても問題はない。現実世界においては病院で点滴をされているのだろうが、それとは別に仮想の空腹感が存在し、ゲーム内で食事をとることで解消される。一部のプレイヤーにとっては、デスゲームと化したソードアート・オンラインの中での唯一の娯楽とすらされている。
三大欲求のうちの二つについてはそうして解決されているものの、最後の一つ――性欲については、極めて難しい問題だった。
このような異常事態になって年齢制限（CERO）もなにも関係ないと言ってしまえばその通りだが、元々ソードアート・オンラインは全年齢対象のゲームソフトであり、女性ＮＰＣが働く娼

館などという気の利いたものは存在しない。
意識しないようにしていれば我慢できないことではないし、人によっては気にならないという者もいるらしいが、四十を手前にして性欲の強い方であるという自覚のある男にとって、その気になればいつでも解消できる睡眠欲や食欲などよりも遙かに死活問題だった。
大昔から比べれば随分と改善されたとはいうものの、ＶＲＭＭＯというジャンルは男女比率に著しい偏りが存在する。正式サービス開始直後の茅場の操作によって、アバターの性別・容姿はプレイヤー本人のものに強制的に統一させられた。
それによって女性（ネカマ）のフリをした男性プレイヤーも一掃されて正しい男女比になっただけでなく、美女、あるいは美少女と呼べるような容姿の女性はアインクラッドからほぼ消滅した。
だからそんな貴重な美少女プレイヤーは最前線のレアドロップなどよりもよほど貴重な存在として、アイドルのように扱われているのだが。
ゲーム開始からしばらく経って、検証勢のプレイヤーから、倫理コードの解除を行うことによって、性行為が可能であることが明らかにされた。その中には自慰も含まれており、男はそれによって欲求を発散していた。
――とは、いえ。
ごく少数ではあるものの綺羅星のような美女が存在するのも事実である。攻略組の中でも最強とされるギルド《血盟騎士団》の副団長《閃光》アスナなどはその最たるものだ。

そんな魅力的な女性を身近に感じながら、彼女たちと肌を重ねることを妄想して自分を慰め続ける日々。現実ではよく
だけでは満足はできなかった。
そんなときだ。この森の奥に現れるという痴女の噂を聞いたのは。
美少女の痴女プレイヤーがヤらせてくれる。
そんな噂を情報屋から高い金(コル)を出して買ったのが昨日のこと。
噂を信じて森の奥に存在する、モンスターが入ってくることのない安全地帯までやってくると、そこには確かに一人のプレイヤーの姿があった。
下品な話であるものの、男の視線を真っ先に惹きつけたのは、その顔立ちではなく胸元だった。衣服の上からでもはっきりとわかる膨らみは巨乳――否、爆乳と表現するに足る豊満なものだった。男はごくりと仮想の生唾を飲み込んでから、遅れて視線を上げる。
いかにも日本人らしい深い墨色の短髪。前髪はキリッと太い眉の上で切り揃えられ、大ぶりな瞳には、この世界に存在しない魅了(チャーム)の魔法でもかかっているかの如く、吸い込まれるような魅力を帯びている。
まだあどけなさが残っている顔立ちは、しかし紛れもなく美少女の部類。年の頃は高校生か、あるいは中学生くらいかもしれない。最初に視線を惹きつけられたあの爆乳との組み合わせのギャップは強烈なエロティックを生んでいた。
《閃光》のような圧倒的な煌びやかこそないものの、容姿のレベル自体はまったく遜色な

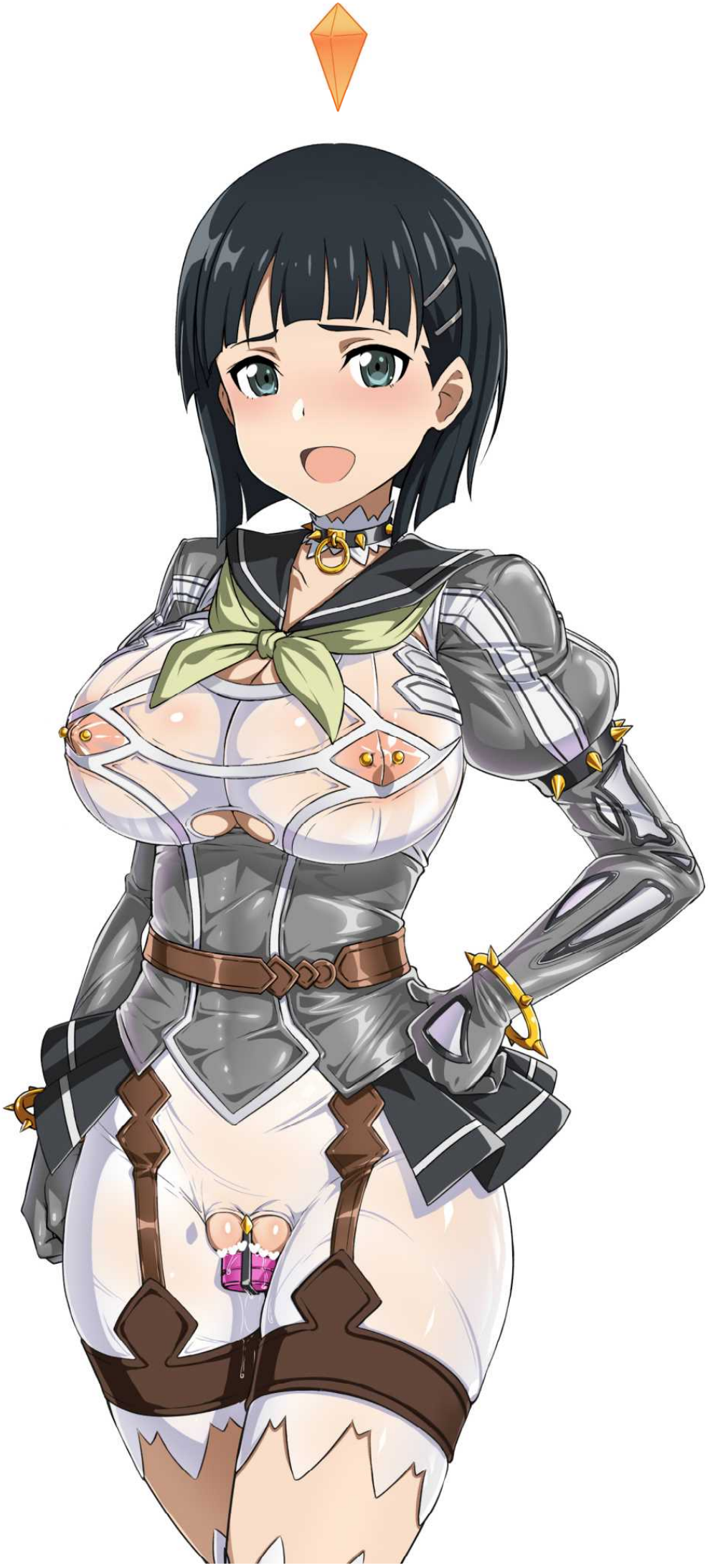
い。ソードアート・オンラインプレイヤー一万人の中で、上位〇・一％未満に属する極上の美少女だった。

この世界においては顔立ちだけではなく、身長や体格までもを現実のそれと一致させられている。つまりあの爆乳も、大ぶりな尻の丸みも、それでいてあどけない顔立ちもすべて現実のものと同じということだ。

コスプレ用の白いスクール水着のようによく透けるレオタードインナーの上から、腰部分がコルセット状になったグレーのアウターを重ねるコーディネート。白いラインの入った黒い襟と胸元を飾るリボンのデザインもあいまって、どことなく現実のセーラー服を想起させる。ただでさえ大きな胸がコルセットによって強調されてとんでもない卑猥さだった。双丘の上下にはまるでそこから挿入れたものを挟むためにあるようなおあつらえ向きの穴が空き、ぷっくりと勃起したいやらしいニップルまわりは、ビニールのような無色透明の素材となって目玉のようにも見える。

スカートは申し訳程度の長さしかないだけではなく前面は抜けていて、スカートというよりもスカートをイメージさせるだけのフリルのようなものだった。レオタードインナーの股間部分は透けているだけではなく大事な部分が切り抜かれて、ヴィイ、ヴィイと振動を続けるディルドが挿入されているのが丸見えだった。

いつの間にか口内に再び溜まっていた唾液を、もう一度飲み下す。まだ倫理コードの解除をしていないため、アバターの肉体に変化こそ現れていないものの、そうでなければ装



備の下からでも、防具を持ち上げるように屹立したモノに気付かれたことだろう。
だらしなく頬を緩めてから、ようやく男はあることに気付いた。
彼女の上に浮かんでいるカーソルの色は――橙色。
その事実に、男は思わず背負った両手剣の柄に手をかける。
ソードアート・オンラインにおいて、モンスターのカーソルカラーは赤で、そのレベルが高ければ高いほどドス黒い血のような赤になって強さの指標となる。一方でプレイヤーのカーソルカラーは緑色。ただし、窃盗や傷害、殺人などの犯罪行為を犯したプレイヤーのカーソルは橙色へと変化する。
そんなプレイヤーをカーソルの色から、犯罪者プレイヤーと呼ぶ。
一口に犯罪者プレイヤーといっても、矛盾するようだがその全員が犯罪者とは限らない。最前線の攻略ギルドの中でも、攻略に役立つ超強力なレアなアイテムを巡って一時的に犯罪者化するのを厭わないものも存在する。その場合でもほとんどの場合、HP全損まで――ということはありえない。
そうでなくとも、事故によるオレンジカーソル化というのはありえる話で、圏外でプレイヤーに攻撃してHPゲージを減らせばそのプレイヤーはシステムから犯罪者として認識される。
そのため味方を援護しようとして、攻撃が当たってしまった、あるいは隠蔽中のプレイヤーに攻撃してしまった、というだけでも犯罪者となってしまうのだ。

ソードアート・オンラインにはごく一部に投擲武器こそあるものの、基本的には弓矢や魔法攻撃といった遠距離攻撃手段はないため、ＦＰＳ（シューティング）などと比べればフレンドリーファイアの危険性は遙かに少ないものの、起こり得る、という程度には起こることだ。

しかしこの世界に裁判官も陪審員もいない。あるのは無慈悲なシステムの裁定だけ。そのため、本人の意志にかかわらず犯罪者化（オレンジ）してしまうプレイヤーというのはそれなりの数が存在する。その状態では安全地帯であるアンチクリミナルコード有効圏内に入ろうとすると衛兵に止められ、圏内の施設や転移門を使えないといった不便はあるものの、圏外村と呼ばれる場所もあるため、そのままではにっちもさっちもいかない、というほどのことではない。犯罪者状態（オレンジ）を解除するには面倒な免罪クエストをクリアしなければいけないこともあって、極端な面倒くさがりなどであれば放置することもある。

とはいえ、カーソルからは、そういった事故でオレンジカーソル化したプレイヤーと積極的に犯罪行為を行うプレイヤーとの判別はできない。プレイヤー間での信頼のためにも、大部分のプレイヤーはすぐに免罪クエストをこなすのだが。

「あ、あの……アンタが噂の痴女、さん？」

男の質問に、少女はにぃ、と、柔らかそうな頬を上げて笑みを浮かべた。

「はい。そうですよ。ふふっ、噂を聞いて来てくれたんですね」

言いながら、彼女はむっちりと肉感を帯びた二の腕で、自身の胸を挟み込むようにして強調してくる。

それだけでもう男の視線は胸元に釘付けになって、彼女に対する懸念はすっかり吹き飛んでしまっていた。
「早く脱いでください」
「えっ……？」
「何を驚いてるんですか？　噂を聞いてヤりにきたんでしょう？　そんな鎧を着たままじゃできないじゃないですか」
ここはアンチクリミナルコード有効圏外。もし彼女が害意のある犯罪者（オレンジ）プレイヤーだった場合、攻撃されればＨＰは減るし、もしゼロになれば死ぬ。犯罪者（オレンジ）プレイヤー相手に圏外で隙を見せるのは文字通りの自殺行為である。
それでも――
「残念ですけど気の利いた風俗嬢じゃないので、ヤる気もない相手とトークだけ、っていうのはお断りですよ？」
男の中で警戒よりも、目の前の、極上の美少女の魅力が勝った。
鍛えに鍛えた自身のステータスに自信があった、ということもある。
もし仮に彼女が危険だと感じたら、すぐに反撃すれば良い。前衛向きのステータスである自分はよほどの高レベル装備でもなければすぐにＨＰが警戒（イエロー）域に入ることもない。
そう考えれば、あれだけの美少女とヤれる機会を逃す方が、よほどに致命的に思えた。
「わ、わかった……脱ぐよ」

男はメニューウィンドウを開き、オプションから倫理コードの解除をタッチ。
それまではアバターに反映されずにいた男の興奮をかたちにするように、ズボンが内側から押し上げられて張り詰める。彼女の熱を帯びた視線が股間に集まることに更なる興奮を覚えながら、男は装備を全除装。それだけならば除草されないインナーまでをも完全に解除する。
ナーブギアの初期キャリブレーション時に身体を測定し、身長や体格までも再現したアバターとはいえど、さすがに性器のサイズまで再現はしていない。
現実の自分よりもふたまわりほども大きいそれが、成人男性の平均サイズでないことを願いたかった。
「私は脱いだ方が良いですか？　着たままの方がコスプレっぽくて好きって人も多いですけど」
彼女はインナーの胸元に空いた穴から、指で胸の谷間を開いてみせる。
「えっと……じゃあ、着たままで」
性器以上に淫猥なその隙間に自分自身を挟み込まれることを夢見ながら、何度目ともわからない生唾を飲み込んで、男は答える。
「はーい」
「その……キミ、名前は？」
「スグ、って呼んでください」

森の奥で全裸になった男の身体を、彼女――スグの視線が舐める。あどけない顔立ちに不釣り合いな妖艶な視線に、男の背筋をゾクゾクと興奮が駆け上がってゆく。
「それじゃあ、はじめましょうか」
彼女がメニューウィンドウを呼び出したかと思った直後、
男の視界の端に表示されたＨＰゲージが、一瞬で三分の一ほど減少した。
「え……？」
手首に不快な感触を覚えて視線を向けると、利き腕である右手の手首から先が林床に落ちており、男の目の前でポリゴンとなって散った。
彼女が男の手を切り落としたのだと気付くのに、数秒を要した。
あまりに突然の出来事だったことに加えて、ここが仮想世界であったことが仇となった。
受けた傷の大きさに比較して、感じる痛みはほとんどなく、だからこそ咄嗟にそれが致命的なものであると気付けなかった。
「っ……！」
反撃、そうでなくとも防御のために武装類を装備しようとメニューウィンドウ開こうとして、できなかった。手首から下を切り落とされていたからだ。
このゲーム内において、これほどの大怪我を負っても、痛み自体はほとんどない。
切り落とされた手首の断面を使ってウィンドウを操作することはできたし、利き腕ではないとはいえ左手で操作することもできるはずだった。

しかしデスゲームであるこのゲームの中で、ＨＰは文字通り自分の命そのもの。それを危険に晒されて、冷静でいられるはずもなかった。結果、マトモに武装を装備することもできない。大怪我によって発生する継続ダメージによって、ジリ、ジリと男の命を定量的にゼロへと近づけてゆく。

「女の子に誘われてエッチできるなんて、そんな美味しすぎることあると思ってるんですか？　こんなゲームに初日からログインしちゃうようなゲームオタクには、妄想（フィクション）と現実（リアル）の区別もつかないのかな？」

溜息を吐く彼女の

彼女の手に握られていた、男の手首を切り落としたそれはＢ級ホラーの殺人鬼あたりが持っていそうな極厚の肉切り包丁。

それを目にした瞬間、男はそれまで

「なん、で、それっ……」

ソードアート・オンラインにおいて、プレイヤーメイドにせよモンスタードロップにせよ、低レベルの装備であれば汎用の名前が設定されているが、レアリティの高い装備にはシステムがランダムに名称を設定する。それらはひとつとして同じものはないとされている。

そんな銘付きの武装はプレイヤーの憧れであり、著名なプレイヤーの銘付き武装であれば、他のプレイヤーからもその銘を知られることになる。

スグが装備したそれを、男は知っていた。
固有名――《友切包丁（メイトチョッパー）》。
恐らくはソードアート・オンラインのゲーム中、血盟騎士団団長ヒースクリフの持つ剣と十字盾ひと組の武装《リベレイター》と同等かそれ以上の知名度を持ち、なによりも比べようもなく最悪の悪名を誇る忌まわしい《魔剣》である。
最前線レベルの鍛冶プレイヤーが作る装備はモンスタードロップのそれよりも高性能であることがほとんどだ。しかしごく稀に、それらと同等、あるいはそれ以上の性能を持つ武器がドロップすることもある。それらはドロップ者の幸運を讃える畏怖を込めて《魔剣》と呼ばれる。
だが、彼女の持つ、分厚い肉切り包丁のような片手剣はそういった意味での《魔剣》であるだけではない。恐らくはこのアインクラッドにおいて、最も多くのプレイヤーの命を奪った本当の意味での《魔剣》でもある。
「その剣っ、ラフコフのっ……」
P（プレイヤー）K（キル）。
VRMMORPGが生まれるより遙か昔、ゲーマーたちがブラウン管でVRMMOをプレイしていた頃から存在する概念である。
マナーの上でその善し悪しをどう判断するかは別として、多くのMMORPGにおいて、PKはゲームシステム上許された行為であり、違法かどうかなど論ずるまでもないものだ

った。ゲームによっては経験値が入ったり、そうでなくとも殺した相手の所有していたアイテムや装備を強奪したりｍ、それらはお世辞にも上品な行為ではなかったものの、製作者側から提示されたプレイスタイルのひとつだった。

ＳＡＯがただのＭＭＯＲＰＧであれば、否――茅場晶彦によって悪夢のデスゲームと化していなければ、ＰＫ（それ）は今までと変わらなかっただろうし、ＰＫｅｒというプレイスタイルも認められるものだっただろう。

だが、今のＳＡＯは違う。

ゲーム内で死ねば、現実のプレイヤー自身も死ぬ。

つまりＳＡＯにおけるＰＫとは、ゲーム上のプレイヤーキャラクターを倒すだけの行為ではなくプレイヤー本人を殺す――文字通りの殺人行為に他ならない。

デスゲームとなったＳＡＯにおいて、プレイヤーたちの目的は究極的にはゲームのクリアだ。そうしなければ現実に帰還することはできないのだから。

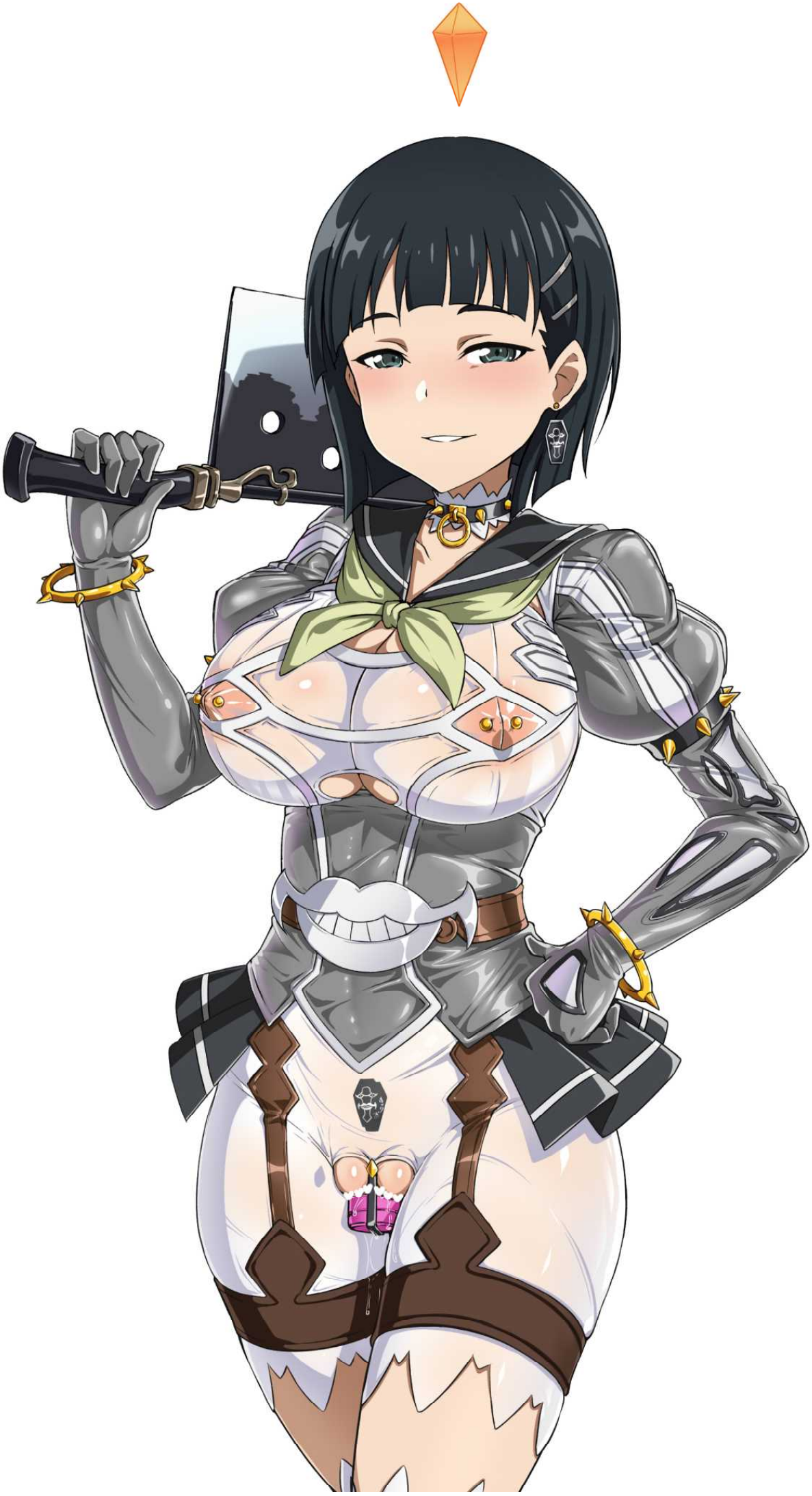
もちろん、プレイヤー全員が一丸になって攻略に挑む、などということが夢物語なのはわかる。死を恐れてはじまりの町に留まり続けたり、攻略を無視して安全な低層で遊ぶプレイヤーがいること自体は不自然ではないし、それを非難するつもりもない。

だがＰＫは、そんな消極的なサボタージュとはわけが違う。

現実へ帰還する可能性を自ら磨り減らすというあり得ない行為だ。

中には利害の一致から命の奪い合いに発展することもある。

しかし、殺人ギルドを名乗る《笑う棺桶》はそれらとは一線を画していた。
目的のためにＰＫするのではなく、ＰＫすること自体を目的としたギルド。
その首領であるＰｏＨという男の武器こそが、彼女の持つ《友切包丁》である。
「ああ、攻略組だけあって知ってるんですね。そうですよ。これはウチの――《笑う棺桶》のギルドマスター、ＰｏＨ様の大事な大事な愛剣。特殊効果は、モンスターを倒すのに使うと武器のステータスが低下して、プレイヤーを殺すのに使えば武器のステータスが上がる。最近、ＰｏＨ様自身は警戒されてなかなか殺せないというので、代わりに私がこの子を育ててるんです」
スグがメニューウィンドウを操作すると、淫猥なコスチュームにそれまで隠れていた意匠が浮かび上がってゆく。淫猥に切り抜かれたニップル部分を目として、コルセットには嘲笑うようなかたちに歪んだ唇、そうして出来上がったのは不気味な棺桶の戯画化。形の良い耳を飾るイヤリングと同じ意匠は、殺人ギルド《笑う棺桶》のエンブレム。
うっとりと、スグは《友切包丁》に頬擦りをしてみせる。その瞳はすっかり陶酔しきっており、彼女が本物の殺人プレイヤーなのは明らかだった。
男の興奮は一転して恐怖へと変わった。冷静な思考などできるはずもなく、男は全裸のまま踵を返してその場から逃げ出そうとする。
「逃がすわけないでしょ？」
トスッ、と。



ちょうど背中の中心に、短剣（ダガー）ほどの大きさの痛みがあって、男は足をもつれさせて勢いよく倒れ込んだ。ＨＰゲージの減りはミリ程度。攻略組プレイヤーとして強力なモンスターと戦ってきた男にとって、その程度のダメージだけで冷静さを失うことはありえない。しかし、興奮の只中から突如として身体の部位を欠損させられるダメージを受けて、しかもそれがあの殺人（レッド）ギルドのメンバーともわかれば冷静さを失うには充分だった。しかし、男の足をもつれさせたのは焦りではなかった。ダメージそのものは微量だった代わりに、男のＨＰバー全体が点滅する緑色の枠に囲まれていた。

攻略組である男には、それが意味するのがなんなのかすぐに理解できた。

麻痺毒だ。

「ふふっ。さすがジョーさんから借りた麻痺毒短剣（ダガー）、効き目は抜群ですね」

「ひっ、あっ……」

林床にうつ伏せに倒れた男の裸体の下にスグの足が差し込まれ、蹴り飛ばすように仰向けにする。

「安心してください。ヤらせてあげるっていうのは本当ですよ。さっきからずぅっと、いやらしい目で凝視してたこのおっぱいまんこで搾り取ってあげます」

こんな状況だというのに――あるいは、極限にまで生命が危険に晒されたこんな状況だからこそ、男の肉棒は痛いほどに勃起して、目の前の殺人（レッド）プレイヤーに劣情の矛先を向けていた。スグはその屹立を見て嘲笑を浮かべながら、男の脚を開かせ、その隙間に身体を

潜り込ませた。
「こんな状況なのにガチガチにしちゃって、恥ずかしくないんですか？」
熱い吐息が肉棒を撫でる。あまりの興奮に鋭敏化した肉棒は、その刺激だけでも官能として受け入れて、鈴口から我慢汁をダラダラと滴らせていた。
「あなたみたいなゲームオタクじゃ一生味わえないはずの現役ＪＣの爆乳おっぱいまんこ、人生の最後に味わわせてあげますね」
ふふっ、とスグは妖艶な笑みを浮かべて、
「イッツ・ショウ・タイム♥」
スグは口を大きく開くと、樋（とい）のように凹ませた舌を伸ばす。ドロリと粘り気の強い唾液が、舌先から糸を引いて滴っていき、我慢汁まみれの亀頭へと着弾する。生温かいその感触に、男の身体がビクンと反応する。気を抜けばそれだけで射精してしまいそうだった。
「簡単にイッちゃったら殺しちゃいますから、歯を食い縛って我慢してくださいね」
スグはいかにも重たそうな乳房を持ち上げ、インナーの南半球に空いた穴を指で拡げる。レオタードインナーに押し込められて窮屈そうな乳肉の隙間に生まれた割れ目が、亀頭に宛がわれて――ずぷっ。
我慢汁と唾液とを潤滑剤として、みるみるうちに怒張が飲み込まれてゆく。
――ずぷっ、ずぷぷっ、ずぷぷぷっ。
「す、ごっ……」

流れ込んでくる快感は自慰などとは比較にもならず、男は苦鳴にも近い喘ぎ声を漏らしてしまう。自分が死の淵にあるということさえ忘れてしまうほどの強烈な快感。

「動物って、命の危険が迫ると性欲が強くなるんだ、って聞いたことありますか？　今、子孫を残さなかったら自分の血が途絶えちゃうって身体もわかってるんですね。だから、これから死ぬことが決まっている男のチンポって、すっごく元気」

無邪気なほどの声音で告げられた言葉は、彼女が今までもこういったことを繰り返してきたことをこの上なく雄弁に語っていた。

恐ろしい。

死にたくない。

逃げなければ。

そんな生存本能とは裏腹に、下半身に送り込まれる快楽は男の腰を砕き、脳を蕩かせる。肉棒が根元まで熱い谷間に咥え込まれたときには、男は射精を我慢することだけで精一杯で、他のことを考える余裕などどこにもなかった。

「じゃあ、動きますよ♥」

レオタードインナーに左右から締め付けられた爆乳の乳圧だけでも天に昇るほどの快感だったのに、乳房の左右から両手で押さえつけてその締め付けをさらに強めてくる。

華奢な指先を柔らかい乳肉に食い込ませるように掴んだまま、スグは乳塊を上下にスライドさせる。

「う、ぁ、ぁっ……」
あまりにも強烈な快感だった。
その快感に、男の麻痺した身体が、解剖中のカエルのようにビクビクと震える。
「気持ちいいでしょう？　《笑う棺桶（ウチのギルド）》でもすっごく評判いいんですよ♥」
スグは言いながら北半球に空いた谷間を指で拡げると、はぁ、と肺の中で熱された吐息を吹きかける。限界を越えて怒張した先端は敏感で、強い乳圧で抑えつけられながらもビクンと力強く跳ねた。
「ひ、ぁっ……」
「もう……情けない声出さないでください。もっとサービス（イジメ）したくなっちゃうじゃないですかぁ♥」
再び舌を伸ばし、谷間に唾液を流し込む。潤滑剤（ローション）を追加されて、窮屈なほど強烈な乳圧の間を怒張が滑らかに抽挿をはじめる。
ズプッ、ズチュッ、ズチュゥッ。
アダルトビデオに出てくるような下品な音を立てて、勃起ペニスが擦られる。
柔らかい乳肉は彼女の興奮が体温として表れているのか、蕩けるほどに熱い。
追加された唾液ローションはただでさえ強かった密着感をさらに高めて、肉棒の周囲三六〇度にキスをされているような錯覚にすら陥る。
「ほら、気持ちいいですか？　答えなかったら止めちゃいますよ？」

「気持ちいいっ、気持ちいいですっ！」
同級生の子供ほどの年頃の少女の乳に弄ばれ、言われるがままに叫ぶ。
「ふふっ。よかった。それじゃあ――」

――もっとヨくしてあげますね♥

あどけない顔立ちを淫魔（サキュバス）のように妖艶に、そして邪悪に歪めて、スグは抽送（パイズリ）を加速させる。
ズチュッ♥　ジュプッ♥　ズチュゥゥッ♥
先ほどにも増して卑猥な音を立てて上下するたび、脳とナーヴギアの間を行き来する電気信号があまりに強いせいなのか、凄まじい快感とともに脳の神経が焼き切れているような錯覚にすら陥る。
奥歯を食い縛り、地獄のような快感に耐え続ける。
射精してしまえば殺されるから――だがそれ以上に、この快感の時間が終わってしまうことこそを恐れるほどに挟乳の快感は甘美に過ぎた。
スグの指が、いやらしく勃起した乳首を弄りながら肉鞠をぐにゅりぐにゅりと変形させる。上下だけではなく、左右にも動きが加わったことで、与えられる刺激はさらに複雑なものとなって男を苛む。

「ほぉら、頭の中真っ白にしてぇ、イッちゃえ♥」
スグがそう口にした直後、ぎゅうと肉棒を挟む乳圧が強くなり、そのまま乳房が男の根元までを一気に呑み込んだ。
「だめっ、もう、でるっ……」
情けない敗北宣言が口をついて出たのと同時、男は限界を迎えた。
睾丸から大量の精子が込み上げて、乳圧に押し潰されて狭窄した輸精管を登ってゆく。
深い谷間から先端だけが覗く亀頭から、びゅるるるっ、と勢いよく白濁が吐き出され、スグの邪悪な笑顔を濁った牡汁で彩ってゆく。
「あ〜あ。もう射精(で)ちゃったんですね。病院のベッドの上で寝ているあなたの現実の身体も、きっと入院着の中でびゅ、びゅっって射精してますよ」
「あ、あぁ……ぁ……」
仮想世界の中で――否、男が生まれてから今までの人生の中で、紛れもなく一番の快感に、男は完全に放心していた。目の前にいるのが殺人鬼であることなど、精液と一緒に頭から抜け落ちて、快感の余韻に意識を飛ばす。
「ふふっ……まだ尿道(ナカ)に残ってますね。それもびゅっびゅっしちゃいましょう♥」
尿道の中に残った精液を搾り出すように、スグが肉棒の根元の方から乳圧を強めてくる。射精直後で敏感な肉棒に抵抗するすべなど残っているはずもなくもはやされるがまま、残っていた精子をすべて乳内へと吐きだしてしまった。

「もうちょっとあなたで遊んでいても良かったんですけど、そろそろ麻痺も解けちゃいますしね」
先ほどまでの熱はどこへいったのか、スグは冷たい口調でそう独りごちると、男の肉棒を乳圧から解放して立ち上がる。
「え……」
「だから――」
スグがメニューウィンドウを操作したかと思えば、次の瞬間には彼女の手元にはあの、分厚い刃を持つ肉切り包丁が握られていた。
快楽に蕩けた男の視線はしかし、次の瞬間にも自分の命を奪うであろう凶器ではなく、自分自身の白濁によって淫靡に彩られたスグの谷間と顔を見つめていた。
直後、《友切包丁（メイトチョッパー）》の極厚の刃がアバターの胸をあっさりと貫いた。
一体どれだけのプレイヤーの血と怨念を吸ってきたのか、まさしく魔剣と呼ぶに相応しい切れ味を持ったその一閃は、男の残りＨＰを一気に吹き飛ばした。
【You are dead】
視界の端に、小さく紫色のメッセージが表示される。
本当に自分が死ぬのか、男には実感がなかった。
今、自分はこれまでの人生で最高の快感の中にいるのだ、と。
しかしこの世界の神は無慈悲に処理を実行する。

身体の感覚が薄れてゆく。
視界が灰色に染まってゆく。
ケタケタと笑う殺人鬼の声が遠ざかる。
柔らかい乳肉の乳圧さえも次第に感じなくなっていき、
男の身体は、ポリゴンの欠片となって四散した。

Sugu（スグ）

本名、桐ヶ谷直葉。

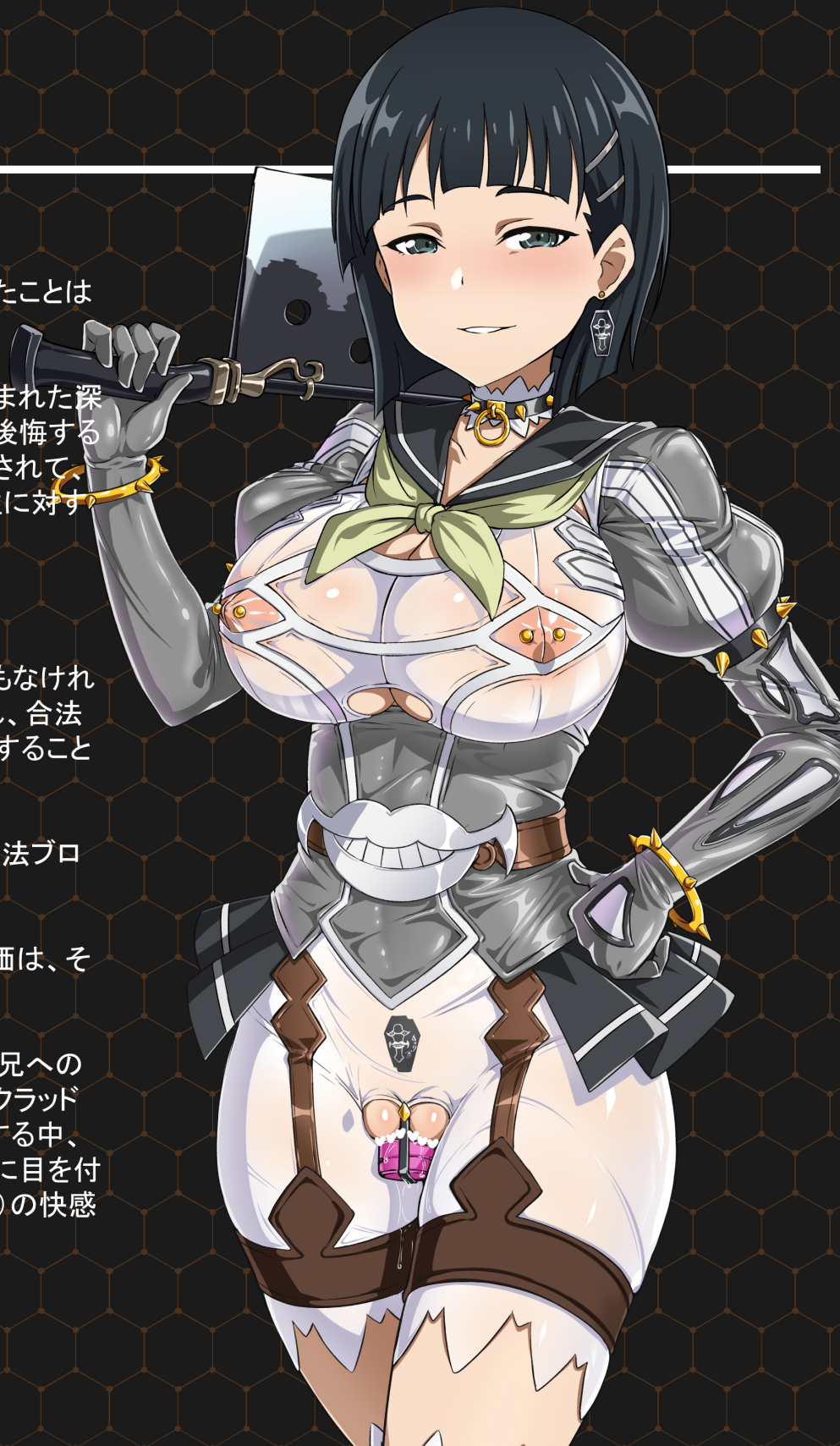
兄である和人がソードアート・オンラインに囚われたことは桐ヶ谷直葉の心に深い闇を落とした。

　かつて兄が剣道をやめてから、自分との間に生まれた深い溝。それを埋めないまま兄が虜囚の身となって後悔する中、両親から和人が本当の兄ではないことを知らされて、それまで抱き続けてきた兄への親愛の念は、異性に対する愛へと変わった。

　――兄と同じ世界に行きたい。

　そんな想いを抱いた直葉だったが、コネクションもなければ経済力もない彼女には既にほとんどが回収され、合法的に入手する手段のなくなったナーヴギアを入手することは困難だった。

　ネット上で様々な情報を探し、行き着いた先は違法ブローカーだった。

　ごく平凡な中学生でしかない直葉に支払える対価は、その瑞々しい身体しかなかった。

　違法薬物を併用した性的調教を受けた直葉は、兄への思慕の情も忘れた色狂いとなって望み通りアインクラッドへと降り立ち、その性的欲求の赴くままに活動をする中、殺人（レッド）ギルド《笑う棺桶（ラフィン・コフィン）》に目を付けられ、性的欲求を満たす手段としての殺人（PK）の快感を刻み込まれた。